

歌道小見

島木赤彦著

岩波書店

大正十三年五月二十五日第一刷發行
昭和二十三年十月二十五日第十九刷發行

歌道小見

定價 百貳拾圓

著者 久保田俊彦

發行所 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者 長野市岡田町一七六番地
田中重彌



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

岩波書店

會員番號 A-10900 四號

はしがき

○「歌道小見」は、歌に入りはじめた人にも、久しく歌の道に居る人にも、或は單に歌を鑑賞する人にも通ずるやうな歌論をなしたいと思つて、稿を起したものである。久しく歌にゐるもの必しも歌を解せず。歌の門外にゐる人が往々巨大の眼で歌を見ることがある。歌の道は、人情自然の道であつて、萬人共通の大道にあるべきである。歌の門内門外を問はず、博く教示をうけたいと希うて、この稿を起した所以である。このうちの一部に、大正十一年或る雑誌のため書

いたものがある。意に満たないで多く改め、且大部分を補足した。

○「萬葉集」の系統は大正八年十月慶應義塾圖書館で口述したもの、筆記である。そのうち歌例の説明は、昨年十月末大連南滿洲鐵道會社食堂で口述したものから採つたものがある。大正八年以後の事に言及してゐる所のあるのは、そのためである。兩所の談話その趣旨殆ど同じである。本書へは、慶應義塾の方を收めた。

○隨見録は、雜誌アララギに書いたものであつて、萬葉集に係あるものと、現歌壇と交渉あるものの一部を輯めた。

○萬葉集の系統隨見錄を收めたのは歌道小見に述べた愚見を、それによつて餘計に明瞭にし得るかと思ふたからである。小著の主眼は歌道小見にある。

大正十三年三月二十二日記す

目次

歌道小見

古來の歌

一

萬葉集

三

萬葉集の性命

八

萬葉集の讀み方

二

萬葉集以後の歌集

一七

古歌集と自己の個性

三

歌を作す第一義

二六

寫生

三六

主觀的言語

三

短歌と日常生活	一四五
山上憶良の事ども	一五二
憶良と赤人	一五九
前田夕暮氏に質す	一六七
萬葉諸相	一七六
萬葉諸相 つづき	一七八
前田夕暮氏の答	一九五
前田夕暮氏の答 つづき	二〇六
萬葉諸相 つづき	二二六
大隈言道の歌	二三二
再び言道について	二四〇
現歌壇と萬葉集	二四五

歌道小見

歌の道を如何に歩むべきかといふことは、人々の性質や經歷によつて、一概に斯くあるべしと定め得るものでないでせう。ここには、只、私の好みと、私一人の信ずる所とによつて、氣の付いたところの大體を述べませう。

古來の歌

1
短歌は、最も古くから日本に生れた詩の一體であつて、それが長い間

の流れをなして今日に傳はつてゐるのでありますから、歌の道にあるほどの人は、古來の歌の中で、少くも權威を持つてゐる歌人の歌を知る必要があります。さうでないと、往々、一人よがりの作品に甘ずるやうな結果を生じます。明治三十年代和歌革新以後にあつて、多少素質のいい作品を遺したと思はれる人の歌を見ても、この人が、どれほどまで古人の歌の前に禮拜したかといふことを思うて、その作品に、或る遺憾を感ずる場合があります。

我々は、自分が生れる時授けられた性情の一面を歪めたり、遺却したりして生長してゐるのが普通であります。現世の環境に歪みがあり、虧缺があるからであります。その遺却され歪められたものが、古人の作品に接觸することによつて、覺まされたり、補はれたりすることが多い

のでありまして、左様な問題に無關心で歌を作してゐる人は、自分では自分全體を投げ出してゐるつもりでも、それが、猶、一人よがりになる場合が多いやうであります。勿論、古人の作品に接することが、自己を覺醒し補足することの全部であるとは思ひませんが、歌の道にあるものが歌の道の由來する所を溫ねて、そこから啓示されるといふことは、直接で自然な道であらうと思ひます。歌に入らうとする人も歌の道に久しく居る人も、この意味で、古人の作品に常に親しむことが結構であると思ひます。それは、古人の作品を見本にして歌を作すこととは違ひます。

萬葉集

それならば、先づ第一に、どんな歌集に親しめばよいかといふことに

なります。それには、私は躊躇するところなく、萬葉集を挙げます。

萬葉集は、我々の遠い祖先から傳はつた歌の精神を、最も素直に受け継いで、それを、廣く、豊かに、深く透徹させて發達したものでありまして、古來の歌集中最も傑れたものであります。これを時代から言ふと、今から千五百年前から、四百四五十年間に亘つた作品を輯めたもので、飛鳥朝藤原朝奈良朝（萬葉集を言ふには、舒明以後奈良朝までを斯様に分けぬと都合が悪いやうです。藤原朝は十數年に過ぎませんが、萬葉集最盛期をなして居ますから、矢張り他と分つ方が好都合です）の作品を最も多く收めてあります。そのうち、飛鳥朝の末頃から、藤原朝を中心として、奈良朝の初期頃までがこの集の頂點を成してゐるのであります、その中で、特に高い位置を占めてゐるのが、柿本人麿と山部赤人です。

あります。この二人は、古來歌聖と言はれてゐる人でありまして、日本の人は、皆その名を知つて居りますが、どんな作品を遺してゐるかといふことは知らぬ人が多いのであります。特に、その作品のうちで、どんなのが傑れた作であるかといふことは、専門の歌人も見當のついて居らぬ人が多いのでありまして、古來、左様な問題に到達して、人麿赤人を説いた人は殆どないのであります。それほど、歌人といふものが、古人の作品に無關心であり、或は、無關心でなくとも、その作品の命にまで觸到するといふことが少なかつたのであります。元來、傑れたものを認めるのは、傑れた心の持主でなければなりません。人麿赤人の歌の高さ深さを知るのは、我々には一つの修業であつて、それが、一面には自分の心を開拓する道になるのであらうと思ひます。

人麿赤人は、萬葉集中の傑れた作者でありますが、この二人を以つて、萬葉集を代表させるといふことは出来ません。それは、この他に猶澤山傑れた作者がありまして、それが、各、自己の本質に根ざして、立派な歌を作してゐるからでありまして、これらの作者は、決して、人麿や赤人を小さくしたり、薄くしたりしたものでありません。萬葉集の作者は、殆ど凡ての人が、皆自己の本質の上に立つて、各特徴ある歌を作してゐるのでありますから、萬葉集を知らうとするには、矢張り、萬葉集全體を知らねばならないのであります。詳しく言へば、萬葉集の初期と末期では、歌の命に可なりの相違があり、特に末期に近づけば、相違が餘計に目に付くのでありますが、それも猶總括的には以上の言が爲されるのであります。歌の數は、長歌短歌せどうか旋頭歌すべて四千五百首ほどであります。

して、作者は、皇帝皇后より農夫漁人、大臣も將軍もあれば防人まもり（今の
守備兵二等卒といふ所です）も資人つかひごと、官人使役の從者です）もあり、下
つては遊行婦女（昔の藝妓です）もあり、乞食もあるといふやうに、す
べての階級を通じての人が、必然の衝迫から赤裸々の人間となつて歌ひ
あげてゐるのでありまして、この點から見れば、各作者の絶對個人的要
求に徹して生れた歌集であると言ひ得ると共に、一面からは、それが、
宛らに當時の民族的性情を代表してゐるといふ觀があります。近頃は、
歌が民衆的でなければならぬ。普遍的でなければならぬ。言ひ換へれば、
一般の人に分るやうに歌はれねばならぬといふ議論が、歌人の一部に行
はれてゐるやうであります。それは議論として差支へありませんが、歌
を作すものが、左様な條件を目安において歌はうとするの愚なることは、

萬葉集作者の態度と、その作品のもつ意義を考へて見れば分ります。ここには横道であります、序を以て言及するのであります。つまり、萬葉集は、何所までも個人的要求から生れた歌集であると共に、それが直ちに民族を代表する歌集になつてゐるのであります。之れは、萬葉集の大きな特質でありまして、單に歌の上のみならず。その他の點から日本民族の血液の源泉を知らうとする人々のためにも、儔罕なる寶典であり得ると思ひます。

萬葉集の性命

萬葉集時代の人は、心が單純で、一途で、調子が大まかで、太くて強いところがあつたやうであります。それが宛らに歌に現れて居ります。

單純一途であるから、原始的な強さと太さを持つて居り、子どもの如き純粹さと自由さを持つて居ります。それが様々の相^{すがた}となつて生長して、或るものは、藝術の至上所と思はれる所にまで到達してゐるのでありますが、左様な所に到達することが、原始的の素朴さや純粹さから離れることを意味してゐないのであります。その所が萬葉集の眞の力の生れる所であり、どの歌を見ても、如何にも生き／＼としてゐる所であらうと思ひます。（後出「萬葉集諸相」參照）今の世の藝術（歌に限りません）猶言へば、藝術に限りません）の力の弱さ、輕さ、甘さが、如何なる所に胚胎してゐるかを考へるものの參考にならうと思ひます。

萬葉集の作者は、平安朝以後の歌人の如く、歌を上品な遊戯品として取扱つて居りません。歌ふ所は、皆、必至已むを得ざる自己の衝迫に根